

高田遺跡群・下堀方形居館

— 古代高田郷と中世の居館 —



例 言

- 1 本書は、散策しながら遺跡が学べるガイドブック「小田原の遺跡探訪シリーズ」として作成しました。今回は第 5 号として、小田原市高田・別堀に所在する高田遺跡群（小田原市 No.16・259 遺跡）および小田原市下堀に所在する下堀方形居館（No.219 遺跡）とその周辺遺跡（No.15・271・272 遺跡）を取り上げました。
- 2 本書の刊行は、平成 21 年度国庫補助事業である「埋蔵文化財保存活用整備事業」の一環として行いました。
- 3 本書の作成に関しては、以下の諸氏・諸機関からご指導・ご協力を頂きました。記して感謝申し上げます。（敬称略・順不同）
荒井秀規（藤沢市教育委員会）、中田英・天野賢一（(財)かながわ考古学財団）、御堂島正・谷口肇（神奈川県教育委員会）、田尾誠敏（東海大学）、藤沢市教育委員会、(財)かながわ考古学財団、神奈川県教育委員会
- 4 本書の作成は、小田原市教育委員会生涯学習部文化財課渡辺千尋が担当者となり、同課山口剛志・佐々木健策・小林隆・諏訪間順が補佐しました。図版の作成には、北條ゆうこの協力を得ました。

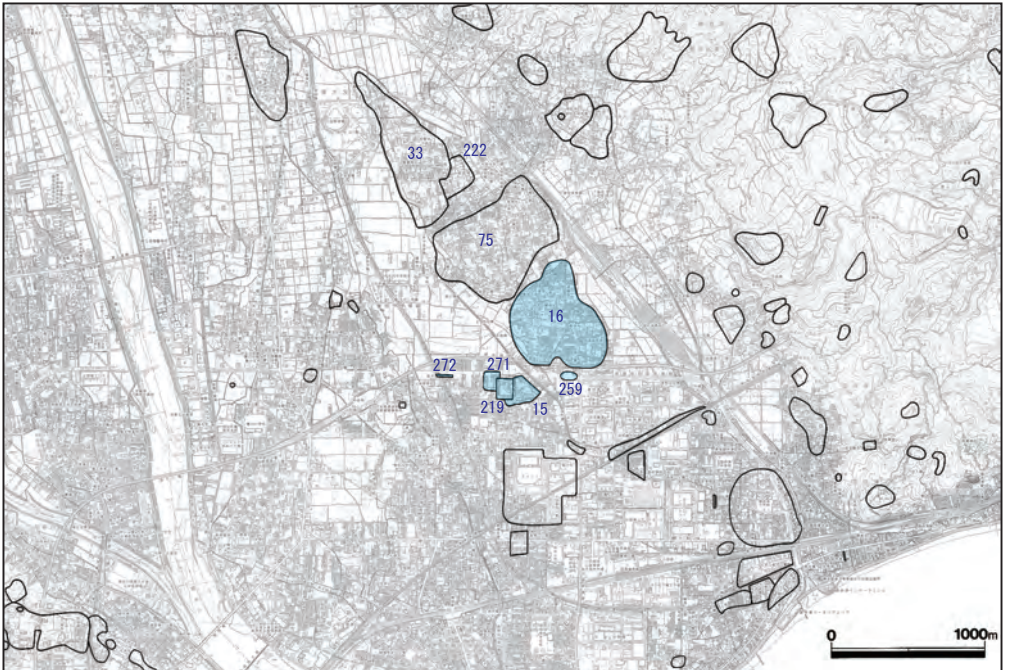


図1 遺跡周辺位置図 (1/50,000)

[表紙] 高田・下堀地区空中写真（成田上空より） (財)かながわ考古学財団提供
[裏表紙] 高田南原遺跡第Ⅱ地点銅鏡 (1/1) 神奈川県教育委員会蔵

I 森戸川右岸の遺跡

1 高田・下堀周辺の遺跡と自然地形

大磯丘陵の西麓^{せいりく}には、JR御殿場線と並行するように森戸川が流れています。森戸川の東岸には、千代台地と呼ばれる標高20～30mほどの小高い丘が広がっています。台地上とその周辺には、千代遺跡群（小田原市No.75 遺跡）や永塚遺跡群（No.33 遺跡）・下曾我遺跡（No.222 遺跡）といった、県内屈指の遺跡群が広がっています（図 1. すでにシリーズ 3・4 で紹介しましたので、詳しくはそちらを参照してください）。

本書で取り上げる高田遺跡群（No.16 遺跡）は、千代台地に広がるもう一つの遺跡で、千代台地の一番南側の高田^{たかた}・別堀^{べつぼり}に所在しています。高田・別堀周辺は、千代台地の中では比較的標高が低く、最も高い若宮八幡宮^{わかみやはちまんぐう}付近で、約20mの高さです。遺跡は主に台地上を中心に広がっていますが、小田原厚木道路を挟んで南側、高田浄水場の北西側の低地部にも広がっていることが、近年明らかになっています（No.259 遺跡）。

また、JR下曾我駅の南およそ1.5kmの場所には、地図上で見ると南北約 130m× 東西約100mの長方形をした区画が残っていることが分かります。これは、中世の屋敷地の名残と考えられるもので、下堀^{しもぼり}方形居館^{ほうけいいきん}と呼ばれています（No.219 遺跡）。下堀方形居館は、鴨宮面^{かのみやめん}と呼ばれる酒匂川^{さうががわ}の氾濫^{はんらん}によって形成された平坦面に位置しています。周辺には、No.271 遺跡・No.272 遺跡やNo.15 遺跡が広がっています。



写真 1 大磯丘陵から高田・下堀方面を望む（1988 年撮影）（大島ほか 1988）

2 高田・下堀の地名

高田の地名は、天平7年(735)の『相模国封戸租交易帳』の中で、舎人親王の封戸の「^{あしのしもぐん}足下郡高田郷伍拾戸」として登場します(写真2)。皇族、貴族や寺院、神社には、経済的特権のひとつとして、封戸に指定された戸が出す調・庸の全部と田租の半分(のうち全部)が支給されました。稲穀で納められた封戸租は重く、運搬には不都合であったため、絹織物などに交換されて都に納められたため、帳簿として交易帳が作成されました。天平7年の『相模国封戸租交易帳』は、現存する唯一の交易帳として正倉院に伝わる貴重な資料です。高田郷で納められた封戸租は、天武天皇の皇子で、『日本書紀』の編纂者としても有名な舎人親王の下へ納められていたことが分かります。

また、承平年間(931～938)に成立した『和名類聚抄』にも「足下郡」の項目に「高田」の地名を確認することができます。古代高田郷の範囲は、「西大友」「東大友」として現代に名が残る北側(大)伴郷との境界まで広がっていたと推測され、現在の高田よりも広域であったと考えられています。

一方、下堀の地名は、戦国時代の永正16年(1519)の『伊勢菊寿丸所領注文』に初めて見られます。江戸時代後期に記された『新編相模國風土記稿』には、「民戸十六。村落ノ四方二堀アリ。幅二間許。」などと記載され、当時の様子を伝えています。

2 高田・下堀の地名

高田遺跡群では、これまで18地点で本格調査が行われています(2010年2月現在)。

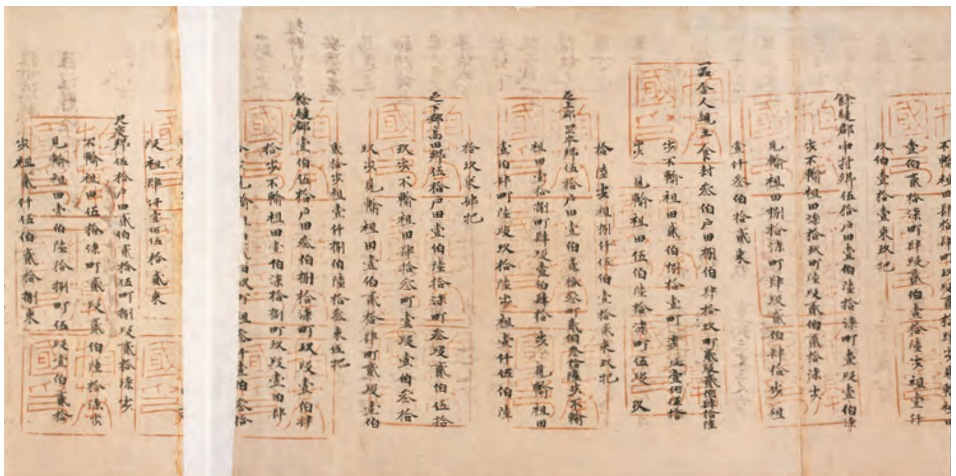


写真2 相模国封戸租交易帳(藤沢市教育委員会所蔵複製 原資料は「正倉院宝物」)

高田遺跡群は、遺跡名を大字小字名により「高田宮町」「高田北之前」「高田南原」
 「高田美弥咲」「別堀十二天」のように呼んでいます。

高田・別堀に広がる高田遺跡群は、昭和30年代に本格的な調査が行われた千代遺跡や下曾我遺跡と比較すると、調査事例はほとんどなく、採集資料によって、その内容の一部が知られている状態でした。昭和59年(1984)の市道拡幅工事(図11-9)では、事前調査がないまま工事が行われるという、不幸な事態が発生してしまいましたが、採集された遺物は、遺跡の内容を検討する上で、貴重な資料となりました。1990年以降は、試掘調査が行われる機会が増加しました。90年代末以降は、宅地化の進行に伴い、本格調査が行われることも多くなり、遺跡の状況が具体的になってきています。

一方、下堀は、^{しもぼりみやのわき}下堀宮ノ脇遺跡(No.15 遺跡)で試掘調査が行われたことはありましたが、現在まで、あまり調査の多い場所ではありません。近年、県道の整備事業に伴って、^{しもぼりつかだまち}下堀塚田町遺跡・^{しもぼりひみつぼ}下堀広坪遺跡(No.271遺跡)、^{しもぼりみちうままち}下堀道上町遺跡(No.272遺跡)で本格調査が行われ、下堀方形居館周辺の様子が次第に明らかになってきています。

年代		時代		おもな出来事	市内の遺跡
近・現代	近世	中世	古・古墳時代		
六〇〇〇年前 一五〇〇年前	五〇〇〇年前 二三〇〇年前頃	五七 二三九	四二四 五三八	弥生時代 縄文時代	旧石器時代 草創期 早期 中期 後期
七〇一 七〇一 七四一 七四一	二一九二 二一九三	飛鳥時代 奈良時代	古墳時代 後期 中期 前期	鉄器や青銅器の使用が始まる 奴国王、後漢光武帝より金印を受ける 卑弥呼が魏に使いを送る 前方後円墳の築造が始まる 倭の五王の時代が始まる 仏教伝来 前方後円墳の築造停止 大化の改新 大宝律令の完成 平城京へ遷都	千代台地がかたち作られる 細石刃が日本列島全体に広まる 土器・石鏃の使用が始まる 定住化の進行 気候温暖化により海面が上昇(縄文海進) 東日本で環状集落がつくられる 北部九州に水稲耕作が伝わる
一八五三 一八六八 一九四五	一七〇七 一六〇三 一五九〇	室町時代 安土桃山時代	平安時代 鎌倉時代 南北朝時代	足利尊氏、室町幕府を開く 徳川家康、江戸幕府を開く 富士山宝永の大噴火	羽根尾貝塚 久野一本松遺跡 前川山王前遺跡 中里遺跡 高田北之前遺跡 高田宮町遺跡 高田南原遺跡 高田南原遺跡 久野下馬下遺跡 久野古墳群
		徳川家康、江戸幕府を開く 富士山宝永の大噴火	源頼朝、征夷大将軍に任じられる 曾我兄弟の仇討 平安京へ遷都	ベリイ来航 五箇条の誓文の公布、明治改元 太平洋戦争終結	谷津山神遺跡 小船森遺跡 小田原城八幡山古郭 下堀方形居館 小田原城総構 史跡小田原城跡 小田原城下関遺跡 早川石丁場群

表1 関連年表

Ⅱ 台地上での暮らし

1 生活のはじまり（旧石器時代～縄文時代）

高田・下堀周辺では、旧石器時代にまで遡る人びとの生活の痕跡は見つかっていません。およそ13,000年前になると、気候が温暖化し、人びとが環境に適応した結果、新しい時代、縄文時代が始まります。市道4385号の改良工事(9)で採集された土器片の中には、縄文時代早期の土器片(約7,000年前)が数点含まれています。千代台地全体でも、縄文時代の集落はほとんど見つかっていないことから、人びとは曾我の丘陵上を主な活動の場として利用し、千代台地にも時おり足を踏み入っていた、そんな光景が想像されます。

2 ムラの誕生（弥生時代後期～古墳時代前期）

3世紀の前半頃、弥生時代後期と呼ばれる時代になると、高田の台地上では、たくさんの住居が造られ、人々の土地利用が活発化しました。高田のムラは、弥生時代後期に始まると言っても良いでしょう。弥生時代後期になり、人びとの活動が活発化する状況は、北側に位置する千代遺跡群や永塚遺跡群とも共通の現象で、古墳時代前期まで継続的に人々の生活が営まれていたようです。

この時代の住まいは、竪穴住居と呼ばれる半地下式の住居が一般的でした（写真3）。



写真3 高田北之前遺跡第Ⅱ地点の竪穴住居
(林原ほか 2001)

地面を数十センチ程度掘りくぼめ、床を整えた後、柱を据え、その上に草や土で屋根を葺いて造ったと考えられています。発掘調査では、上屋が確認されることはまずないため、掘りくぼめた住居の穴や柱の穴だけが検出されることがほとんどです。また、当時の人々が繰り返し生活の中で踏み固めた床が、硬い土の層として確認されたり、住居の中に造られた炉が検出されたりすることもあります。

若宮八幡宮東側の高田宮町遺跡第Ⅲ地点(6)では、約40㎡の小さな面積の調査でしたが、10軒以上の住居が重層的に検出されました(写真4)。周辺の高田北之前遺跡第Ⅱ地点(2)でも、9軒の竪穴住居が検出されていることから、若宮八幡宮周辺には、この時期の大規模なムラが継続して作られていたことが考えられます。このほかに東学寺^{とうがくじ}の南側の別堀十二天遺跡にもムラがつくられていたようです。

高田美弥咲遺跡第Ⅰ地点(13)や別堀十二天遺跡第Ⅱ～Ⅵ地点(15～19)などでは、地割れが多く見つかっています(写真5・6)。地割れは、弥生時代～古墳時代の住居などのかたちを壊しているため、調査を難しくしていることが多く、発掘の担当者を悩ませることもしばしばです。小田原は、江戸時代以降で、記録に残っているだけでも20回以上の大きな地震の被害を受けている地域です。遺跡に残る地割れの時期を特定することは、精緻な検討が必要ですが、自然災害と上手に付き合っていくヒントが、遺跡の中に隠されているかもしれません。



写真4 高田宮町遺跡第Ⅲ地点の竪穴住居群



写真5 高田美弥咲遺跡第Ⅰ地点の地割れ(斜めに黒く見える部分が地割れ)



写真6 別堀十二天遺跡第Ⅱ地点の地割れ(細かく不規則なひびが地割れ)

3 ムラで使われた道具

高田遺跡群では、発掘調査に伴って、数多くの遺物が出土しています。土器は、水や食料を貯蔵するための壺や煮炊きを使用するための台付甕、食べ物を盛るための高坏など、さまざまな種類のものが見つかっています。千代遺跡群と同様に、高田遺跡群からも東海地方西部や中部高地方面の土器などが見つかり、他地域との交流をもったムラが存在していたことが推定されます。

ここでは、高田遺跡群で見つかった珍しい遺物を2点ご紹介します。

ひとつ目は、高田宮町遺跡第Ⅲ地点(6)の竪穴住居で見つかった弥生時代後期の壺形土器です(写真7)。壺の肩の部分に片口状に小さな口が2つ付けられた特徴的なかたちですが、全国的にも類例が少なく、はっきりとした使い方は分かっていません。このような壺が、高田のムラの中でどのように使われたのか、興味深いところです。

ふたつ目は、高田北之前遺跡第Ⅱ地点(2)で見つかった、磨製石剣と呼ばれる石器です(写真8)。古墳時代後期の竪穴住居から出土しましたが、類例から弥生時代中期のものと考えられています。磨製石剣も東日本では資料数が限られるものですが、類似する事例が西日本で確認されています。使われている石材が、小田原周辺では採取できない頁岩と呼ばれる種類の石であることも注目されます。出土した磨製石剣は、先端部のみが残っています。全体的に丁寧に研磨され、黒光りし、刃の稜線である鑄が作り出されています。刃の部分は、潰して仕上げられていることから、実用的なものではなく、金属製の短剣を模倣した祭祀用の道具であったと考えられます。



写真7 高田宮町遺跡第Ⅲ地点出土土器



写真8 高田北之前遺跡第Ⅱ地点出土磨製石剣

4 墓の造営

高田の台地には、弥生時代後期から古墳時代前期の人々が暮らしていた集落が広がっていた一方で、亡くなった人々を葬る墓、方形周溝墓も見つかっています。

方形周溝墓とは、長さ 5～20m 程度の溝で周囲を四角く囲み、中央の部分に埋葬施設を作った墓のことです。周囲の溝は、つながって全周するものや、一隅だけが途切れるものなどがあります。高田では、調査面積が限られているため、部分的ではありますが、台地の北側の高田北之前遺跡第Ⅲ地点(3)や南側に位置する高田南原遺跡第Ⅲ地点(12)で方形周溝墓が見つかっています(写真9)。

集落から程近い、台地の端のほうに墓域が広がっていたことが考えられます。しかし、集落の規模に比べ、見つかっている方形周溝墓の数は限られていることから、すべての人が方形周溝墓に埋葬されたわけではなく、特定の人びとが、方形周溝墓に埋葬されていたようです。

高田北之前遺跡第Ⅲ地点(3)の方形周溝墓の周溝からは、小田原では珍しい壺形土器が見つかっています(写真10)。土器の特徴から、「吉ヶ谷式土器」と呼ばれる土器であることが明らかになりました。吉ヶ谷式土器は、現在の埼玉県北西部～中央部を中心に分布する弥生時代後期の土器として知られています。方形周溝墓からこのような他地域の土器が出土したことは、方形周溝墓に埋葬された人や、方形周溝墓を造り、祭祀を行った人びとの系譜を考える上でとても興味深いことで注目されます。



写真9 高田北之前遺跡第Ⅲ地点の方形周溝墓



写真10 高田北之前遺跡第Ⅲ地点出土土器

Ⅲ 高田南原遺跡第Ⅱ地点の調査

(古墳時代前期)

1 低地部の調査

第Ⅱ章では、台地上の遺跡の様子を見てきましたが、ここでは、小田原厚木道路の南側、高田浄水場周辺で行われた高田南原遺跡第Ⅱ地点(11)の調査成果をもとに、低地部での人々の活動を紹介していきましょう。

高田南原遺跡第Ⅱ地点は、県道の整備事業に伴い、平成17年(2005)年の3月～8月に発掘調査が行われました。この一帯は、標高がおよそ12mと周辺よりも低く、かつては低湿地のような環境であったと考えられています。調査が行われる前までは水田として土地利用が行われていました。近年まで、遺跡の存在が知られていませんでしたが、多大な調査成果が挙がっています。



写真11 高田南原遺跡第Ⅱ地点の溝
(天野ほか 2006)

2 低地部での生産活動

調査の結果、古墳時代前期と後期の溝が見つかりました(写真11)。水田の利用など、人びとが低地部に進出した結果、用水路と考えられる溝が新たに造られるようになりました。

古墳時代前期の溝は、3条が確認されています。80m以上にわたって検出された東西方向の溝に、南北方向の溝が連結する構造が、特に注目されます。溝の壁には突出する部分があり、板材などによって、水量調節を行っていた水門すいもんや止水堰しすいげきのような施設であった可能性が考えられています。

溝やその周辺は、水分の多い環境であったために、通常の遺跡では腐ってしまうような木製品が良好な状態で、

2,000点以上も出土しました(写真12)。

そのほとんどは、杭や板材などですが、^{くわ}鋤や^{たげた}田下駄といった農耕具が出土し、県内でも類例の限られる貴重な資料となりました。また、大型の半円状の木製品は、長方形の穴があけられたもので、もともと別の製品であったものが^{せき}堰などの施設の部材として転用されている可能性が指摘されているもので、注目されます。

鋤は、全部で3点見^{ひろくわ}つかり、^さ広鋤や^{くわ}狭鋤といった種類がありました(写真13)。顕微鏡観察による樹種同定の結果、^{きょうじん}強靱で弾力性のあるブナ科コナラ属の木材が使用されていることが分かりました。また、田下駄は板状のものが4点検出されていますが、スギが用いられていました(写真14)。田下駄などの板状の製品にスギを用いることは、東海地方東部のスギの多い地域では、一般的なあり方とされています。

遺跡周辺は、花粉分析の結果から、スギ林やコナラ属アカガシ亜属の^{しょうよう}照葉^{じゅりん}樹林が分布していたことが推定されています。これらのことから、農耕具の製作には、^{しよくせい}周辺の植生から比較的容易に手に入れられる木材の中から、農耕具の機能に合わせて^{じゆしゆ}樹種を選択していることがうかがわれます。考古学的な成果に、科学的な分析を組み合わせ



写真12 高田南原遺跡第II地点木製品出土状況
(天野ほか 2006)



写真13 高田南原遺跡第II地点出土木製品「鋤」
(天野ほか 2006)



写真14 高田南原遺跡第II地点出土木製品
「田下駄」(天野ほか 2006)

せることで、当時の人びとの生活の知恵が明らかにされました。

一方、古墳時代後期の溝は4条が確認されました。80m以上の長さが検出された東西方向の溝からは、7世紀後半を中心に6世紀～8世紀初頭の土師器や須恵器の破片が大量に見つかっています。この時期のものとしては、輪かんじき田下駄の足板と考えられる木製品が見つかっています。古墳時代前期の田下駄と同様に、スギ材が用いられていました。

3 水辺の祭祀

高田南原遺跡第Ⅱ地点の調査では、木製品が多く見つかったことのほかに、青銅製品が複数出土していることも、注目される調査成果でした。古墳時代前期のものと推定される銅鏡と弥生時代後期のものと推定される銅釦が検出されました。

銅鏡は、直径8.1cm、重さ45.9g、中国鏡を模倣して国内で作られた小型仿製鏡と呼ばれるもので、単独で出土しました(写真16)。ももとの鑄上りが悪い上に、かなり磨耗しているため、文様が不鮮明ですが、遺存状態は比較的良好です。鏡背には、乳と呼ばれる突起が4つ付けられ、文様を分割していますが、それぞれの間には、放射状の直線や珠文とよばれる玉状の文様を不規則に施しています(図2)。この文様の特徴から珠文鏡と呼ばれる鏡の種類に分類することができます。表面は緑青で覆われてしまっていますが、本来は銅の光沢によって、鏡面は光り輝いていたことでしょう。

鏡の中央には、鈕と呼ばれるつまみが付いています。鈕には、幅2.5mmの樹皮が



写真15 高田南原遺跡第Ⅱ地点銅釦出土状況
(天野ほか 2006)

残存しているという、大変珍しい状況が確認されました(写真17)。鈕に巻き付けられた樹皮は、鏡を吊るし持つための紐の役割をしていたのでしょう。

一方、銅釦も遺構からではなく単独で出土しました(写真15)。約1/3が欠損し、全体的にやや歪んでいますが、遺存状態は良好でした。ほとんど風化はしておらず、出土状況の写真が物語るように、1,700年前後も地中に埋まってい

たとは思えない金属の輝きを残していました。

小田原市域では、完形の銅鏡の出土例として、永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点の住居跡から出土した重圏文鏡じゅうけんもんきょうが知られています(シリーズ4参照)。また、銅釧の出土事例としては、千代南原遺跡第ⅩⅡ地点の2点が知られています(シリーズ3参照)。

このように県内でも希少な青銅製品が森戸川流域に位置する遺跡群で相次いで検出されていることは、この地域に住む人びとが、青銅製品を手に入れる力を持っていたということが考えられるでしょう。

また、古墳時代後期のものとして、溝からまがたま勾玉やうすだま白玉といった石製品が見つかっています。いずれも祭祀的な性格の強い遺物であると考えられています。

古墳時代前期の青銅製品や古墳時代後期の石製品が出土していることは、高田遺跡群の低地部が単なる生産の場であったというだけでなく、水辺での祭祀が行われたような場所であったことが考えられるでしょう。

近年まで、遺跡の存在があまり知られていなかった低地部の調査が進んだことで、新しい歴史の姿が見えてきています。



写真 16 高田南原遺跡第Ⅱ地点出土銅鏡(1/2)
(天野ほか、2006)

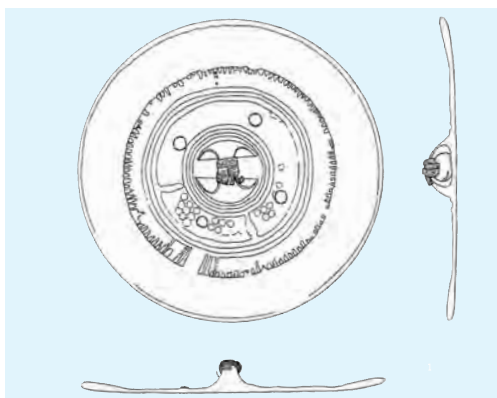


図 2 高田南原遺跡第Ⅱ地点出土銅鏡実測図
(1/2) (天野ほか、2006)



写真 17 高田南原遺跡第Ⅱ地点銅鏡鈕拡大
(天野ほか、2006)

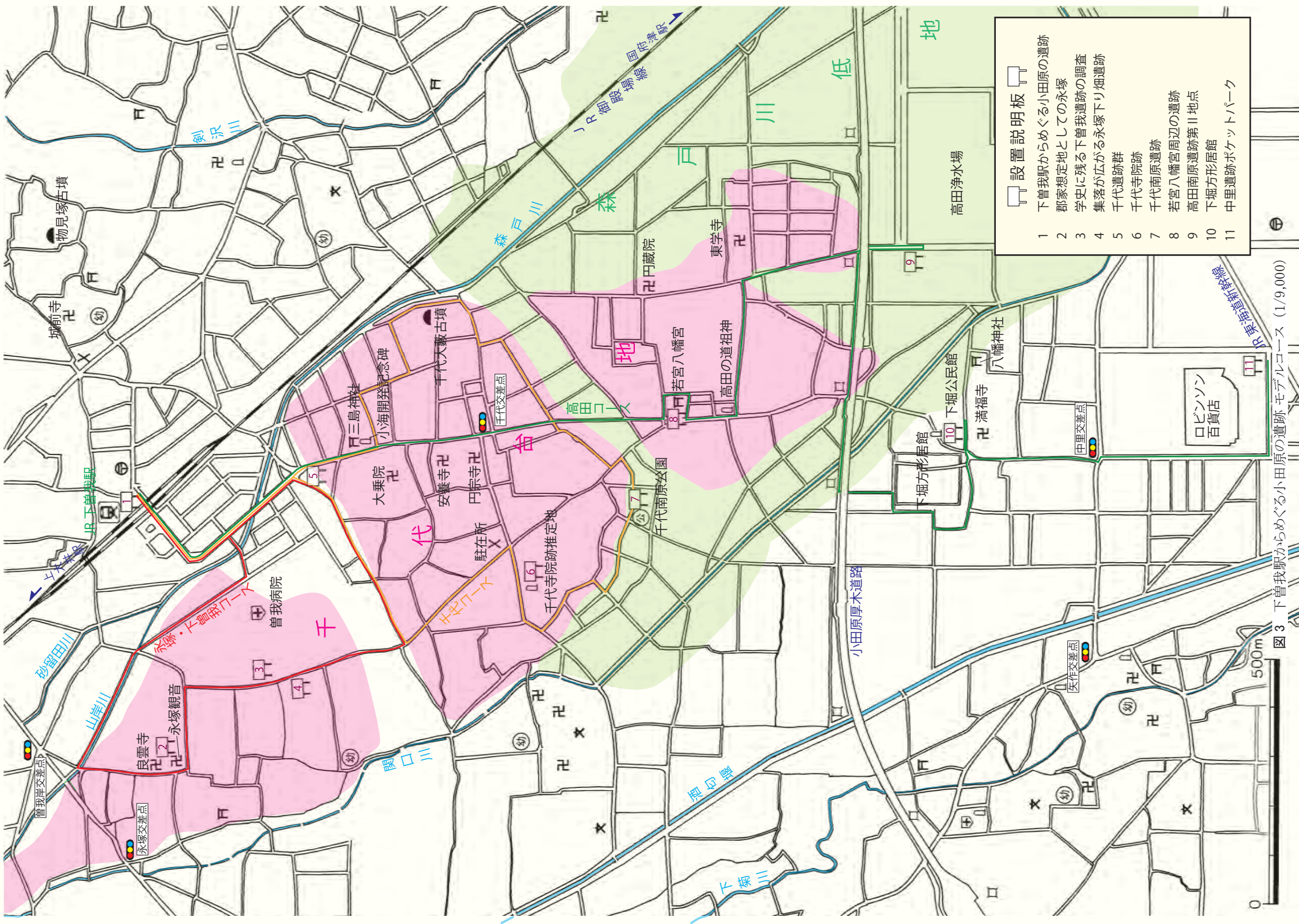


図3 下曽我駅からめぐる小田原の遺跡 モデルコース (1/9,000)

IV 発掘調査にみる高田郷

(古墳時代後期～奈良・平安時代)

1 森戸川流域の古代遺跡

8世紀初頭に確立した律令国家体制では、地方は、国・郡・里（のち郷）という行政組織によって重層的に支配されていました。高田周辺は、律令国家のもとでは、相模国足下郡高田郷に属していたと考えられています（図4）。

高田郷には、永塚遺跡群・下曾我遺跡周辺に推定されている郡家や、千代遺跡群に所在した千代寺院跡（千代廃寺）が含まれていたものと考えられています。郡家はいわば古代の役所であり、大型の掘立柱建物が計画的に配置され、寺院とともに地域の拠点であったと考えられています。このような拠点が高田郷に造られた背景には、森戸川と古東海道を結ぶ水陸の交通の要衝であったということが指摘できます。

この時代の東海道は、足柄峠を越えて南足柄市関本に推定されている坂本駅家を通り、足柄平野を東西に横断した後、大磯丘陵沿いに南下して、国府津付近と推定される小総駅家へと続いていたと想定されています。駅家は、駅馬の乗り継ぎや食料の支給、宿泊所の提供などを行った公的施設で、30里（約16km）ごとに設定する規定があ



図4 郡界と郷の配置 (1/200,000) (藤沢市教育委員会博物館建設準備担当 1997)

りました。古東海道が森戸川とつながる場所、それが高田郷だったのでしょ。

それでは、高田郷の一角に位置していた高田遺跡群の様子を見ていきましょう。

2 古代集落の営み

古墳時代前期に集落のピークを迎えた高田遺跡群ですが、5世紀後半には再び人々の生活の痕跡を確認することができます。市道4385号の拡幅工事(9)で採集された資料の中には、小型甃はちや樽型甃はちなど、珍しい古式須恵器こしきが含まれています。

若宮八幡宮北側の高田北之前遺跡第Ⅱ地点(2)では、竪穴住居11軒を含む6世紀後半～10世紀前半の遺構・遺物が確認されています(図5)。竪穴住居からは当時の人びとが生活に利用した土師器や須恵器のほか、土製品・石製品・鉄製品が出土しています。なかでも、漁撈用のおもりとして用いられた土錘ぎよらうや、繊維に撚よりをかけて糸を作るために用いた石製紡錘車ぼうすいしゃや鉄製の紡錘車は、当時の人びとの暮らしを彷彿とさせています(写



写真 18 高田北之前遺跡第Ⅱ地点出土石製紡錘車(紡輪)と鉄製紡錘車

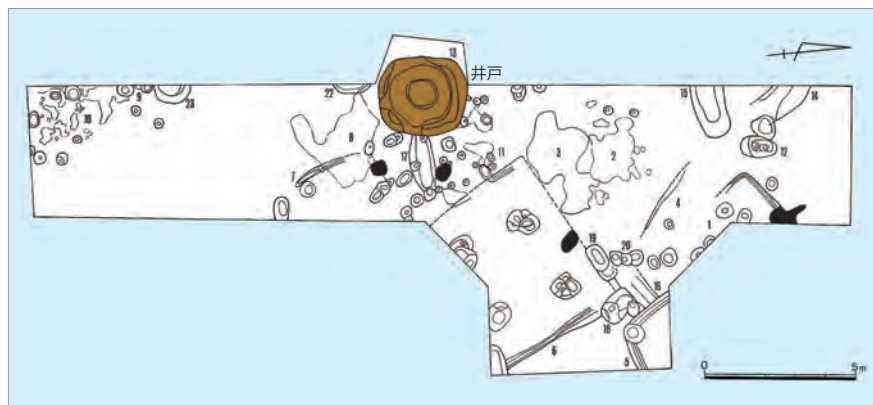


図5 高田北之前遺跡第Ⅱ地点古代遺構配置図(1/250)

真18)。また、剣のかたちを小型に模倣した石製模造品も出土していますが、集落の中
 で行われた祭祀に用いられたものと考えられ、同じく祭祀に用いられることもあった石製
 紡錘車とともに、高田遺跡群の性格を考える上で重要な遺物です。

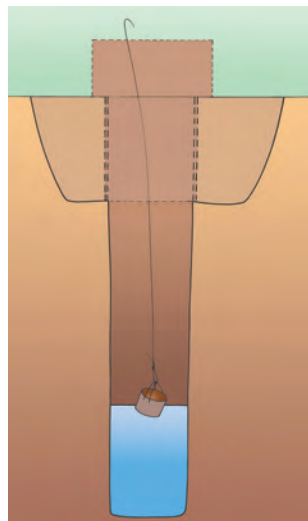


写真 19 高田北之前遺跡第Ⅱ地点の井戸跡 (林原ほか 2001)

図 6 井戸跡の模式断面図

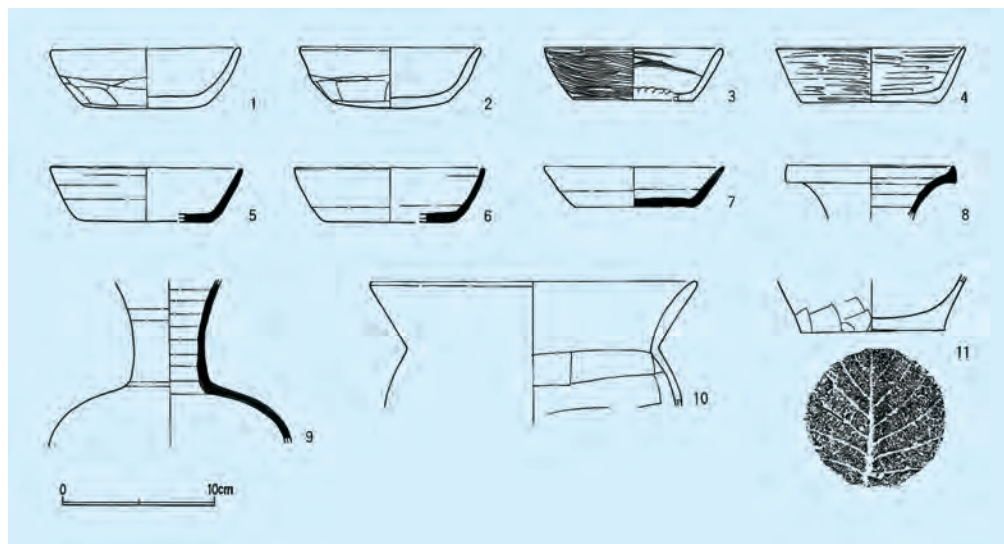


図 7 高田北之前遺跡第Ⅱ地点井戸跡出土土器実測図 (1/5) (林原ほか 2001)

また、8世紀前半頃に機能していたと考えられる大型の井戸が見つかっています(写真19)。井戸は、2.6×3.0mの範囲を1.2m掘り下げた後、直径約1.0mの^{たてこう}堅坑を約4.8mの深さまで掘り下げた構造をしています(図6)。井戸からは、土師器坏などとともに須恵器^{ちようけいへい}長頸瓶が出土しています(図7-9)。この長頸瓶は、仏前に水を供したり、法会で僧侶が用いたりした^{すいびょう}水瓶であると考えられます。井戸が機能していた時期は、千代に寺院が造営されていた時期であるため、関係が注目されます。

このほかにも、台地の北側に位置している高田北之前遺跡第Ⅰ地点(1)で7世紀末～8世紀後半の、台地南側の高田南原遺跡第Ⅰ地点(10)で7世紀前半～9世紀初頭にかけての堅穴住居が見つかっています。千代台地に郡家や寺院が造営された頃の集落が、台地上に点々と広がっていたことが考えられ、高田郷の姿を垣間見せています。

3 寺院・郡家に関連する遺物

高田遺跡群の北側には、足下郡家や千代寺院跡(千代廃寺)が造営されていたため、近接する高田遺跡群にもそれらと関係するような遺物が見つかっています。

高田北之前遺跡第Ⅱ地点(2)では、先に述べた水瓶のほかに、^{せつか}石鏝と呼ばれる帯飾りが出土しています。律令国家の^{かんじん}官人の服装は、着物の色や履物などの身に付けるさまざまなものが、^い位階によって規定されていましたが、^{ようたい}腰帯もそのうちのひとつでした。腰帯には、バックル部分や先端部分の金具のほかに、主に銅で作られた鏝^かと呼ばれる帯金具があり

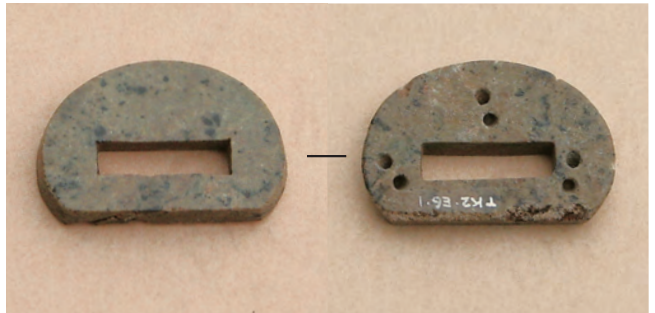


写真 20 高田北之前遺跡第Ⅱ地点出土石鏝(1/1)

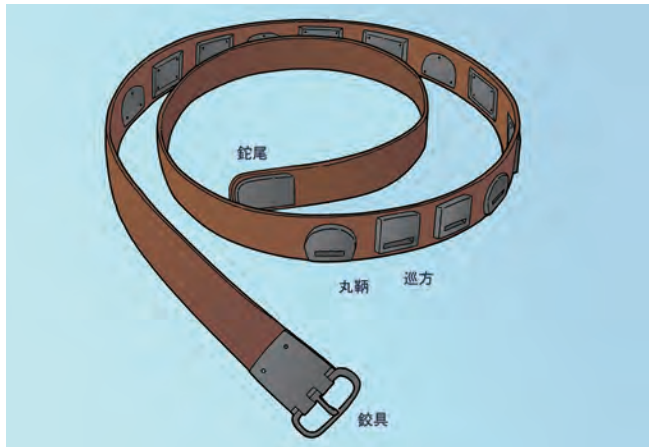


図 8 腰帯具の装着模式図

ました。

銅製の鑄の代わりに石を用いたものが石鑄で、高田北之前遺跡第Ⅱ地点からは、かまぼこ形をした丸軻まるとことよばれるタイプのものが出土しました(写真20・図8)。裏面には、帯に取り付けるために潜り穴と呼ばれる2孔1対の孔が穿たれています。郡家に勤める官人が身に付けていたものかもしれません。

別堀十二天遺跡第Ⅶ地点(20)からは、青銅製散蓮華形小匙せいでんりやうせんげんがたこまじが出土しています(写真21)。柄の先端が欠損し、付け根の部分で曲がってしまっていますが、銅匙は県内でも他に3例しか見つかっていない貴重な遺物です。奈良時代には、仏教行事に用いられる道具として知られており、寺院との関連が考えられます。同一のタイプの銅匙は、県内では大磯町釜口古墳出土のものが知られています。

また、高田宮町遺跡第Ⅳ地点(7)からは、土器の底に吉祥句である「千万」と墨で書かれた灰釉陶器かいゆうとうきが見つかりました(写真22)。「万」の字が墨書された土器は、特に寺院に関連する遺跡から出土することが多く、千代の寺院跡との関連が注目されます。墨書土器は、地方の官衙遺跡で出土することも多く、郡家の存在を裏付けるように、下曾我遺跡や永塚遺跡群で、多く見つかっています(シリーズ4参照)。



写真21 別堀十二天遺跡第Ⅶ地点出土銅匙



写真22 高田宮町遺跡第Ⅳ地点出土墨書土器「千万」

V 下堀に広がる中世の遺跡

1 中世前期の景観

平安時代の終わり頃から戦国時代が始まるまでの時期については、小田原市域全体でも発掘調査成果に恵まれておらず、詳しいことはあまり分かっていない状態です。

高田遺跡群では、高田北之前遺跡第 I 地点(1)で、13世紀と推定される溝が検出され、瓦器鉢やかわけ、古瀬戸の瓶子が出土しています。高田には、土塁と空堀によって構成された「高田空堀遺構」が存在するとの指摘が、小田原城郭研究会によってなされていることから、未知の遺構が検出される可能性も注目されています。

2 蔵骨器の出土

下堀宮ノ脇遺跡第 I 地点(22)では、三筋壺が出土しました。三筋壺とは、胴の部分に3本の筋がめぐる壺で、小田原市内では他に久野多古境遺跡で出土しています(シリーズ2参照)。久野多古境遺跡の三筋壺は、川原石で蓋をされた内部に火葬骨が入っていました。

一方、下堀宮ノ脇遺跡の三筋壺は、土師質の土器によって蓋をされていましたが、内部からは何も検出されませんでした(写真 23)。三筋壺は、蔵骨器としてのほかに、経筒を入れる容器として用いられることもあります。下堀の三筋壺が出土した周辺は、硬く締まった土層が塚状になっており、墳墓であった可能性が考えられます。

下堀の三筋壺は、現在の愛知県常滑市周辺で生産されたもので、12世紀末に焼かれたものと考えられています。



写真 23 下堀宮ノ脇遺跡第 I 地点出土三筋壺の埋納状況の復元

3 下堀に残る中世の居館跡

(1) 下堀方形居館のあらまし

下堀には、下堀方形居館と呼ばれる中世の土豪クラスの居館と推定される遺構が残っています。明治10年に地誌情報を集成したとされる『大日本国誌』には「下堀城址」として記載があり、下堀方形居館は甲斐武田氏の^{みしん}家臣である志村氏の居館であったとされています。現在でも、居館周辺には、志村姓が多く残っていますが、志村氏の^{しむつじ}出自は明らかではありません。

堀の名残である用水路に囲まれた区画は、南北129m×東西103mの規模で、戦前までは四方に残っていたとされる土塁が、北西隅や西面の南側に今も残っています(写真24・図9)。南面の東側の部分がやや外側に広がっていることから、この部分に主要出入口としての^{こぐち}虎口があった可能性も指摘されています。このほかに、西面の中央部や北面の西側辺りにも^{かいこう}開口部があったと推定されていますが、居館内部の構造は調査が行われたことがなく、不明な点が多く残されています。



写真24 下堀方形居館空中写真(南から)(かながわ考古学財団提供)

(2) 二重の堀の検出

平成18年(2006)6月から下堀方形居館の北西側で行われた、下堀広坪・下堀塚田町遺跡第I地点(21)の調査では、下堀方形居館周辺部の構造が明らかになりました。

特に注目されることは、方形居館を取り囲む内堀と外堀の二重の堀が検出されたことでした。内堀は、北側の立ち上がり部分が確認され、土塁の裾から約7mの幅があることが明らかになりました。内堀は土塁に沿うように北西側で直角に向きを変え、南側に展開しているものと推定されます。堀の中の土からは、17世紀～18世紀代の陶器が出土しており、江戸時代には、居館の堀としての機能はすでに失っていたことが想定されます。しかしながら、堀は用水路としてかたちを変えながらも現在まで名残をとどめています。

また、外堀は幅6m前後、深さ約1.3mの規模で、内堀から北側に約12m離れた位置で、東西約39m、南北18mにわたって検出されました(写真25)。堀の断面形は逆台形状をし、堀底はほぼ平坦に作られていました。内堀と同様に北西側で土塁に沿うように直角に南側へ向きを変えていることが明らかになりました。



写真25 下堀広坪遺跡第I地点堀調査状況
(かながわ考古学財団提供)

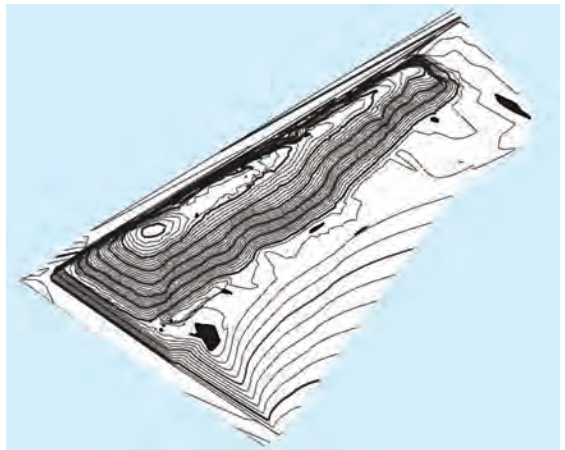


図9 下堀方形居館の土塁の俯瞰測量図
(かながわ考古学財団提供)



写真 26 下堀広坪遺跡第 I 地点堀出土漆碗
(かながわ考古学財団提供)



写真 27 下堀広坪遺跡第 I 地点堀出土筭
(かながわ考古学財団提供)

堀の下層からは、中世の青磁碗、明染付、常滑大甕など、陶磁器類の破片が見つかり、堀や居館の年代を検討するうえで、重要な資料になりました。また、堀底からは、水が常に湧き出るような状態であったため、漆器や木製品、銅製品の腐食が進まず、良好な状態で検出されました。

漆器は、碗や蓋、櫛など 30 点近くが見つかり、つくりが丁寧なものも認められます (写真 26)。木製品は、下駄や形代などが検出されました。銅製品では、髪をかきあげるために用いた筭が完全な形で見つかりました。花菱と思われる家紋が施されていることが特徴的です (写真 27)。

(3) 堀の外側の調査

外堀の西側でも中世の遺構が多く見ついています (図 10)。

井戸跡は、調査区内に分散するように 10 基以上が見つかりました。もっとも大きいものは、直径 1.3m、深さ 1.5m の規模で、常滑の大甕が出土しています。柱穴は、400 基以上が検出されました。径 25cm、深さ 30cm 前後の規模で、平面が方形をしているものが多く見られます。規則的な配置をしているものが見られ、掘立柱建物を構成していたものと考えられます。建物の具体的な機能は、出土遺物も少なく不明な点が多く残っていますが、居館と同様に南北方向を意識して作られているものも見られ、居館に伴う施設などが計画的に建てられていたことが想定できます。

また、下堀方形居館から西に300m離れた地点で、平成18年(2006)9月から断続的に行われた下堀道上町遺跡第Ⅰ地点の調査では、下堀方形居館とほぼ同時期と考えられる溝を多数検出しました。田畑の水路や土地を区画するための溝であった可能性が考えられています。居館と同一の軸線で規則的に作られているものも多く、下堀方形居館一帯が、整然とした区画割りがなされていたことが明らかとなっています。

溝からは、中世の陶磁器が見つかったほかに、こぶし大の礫がまとまって出土する部分も認められました。

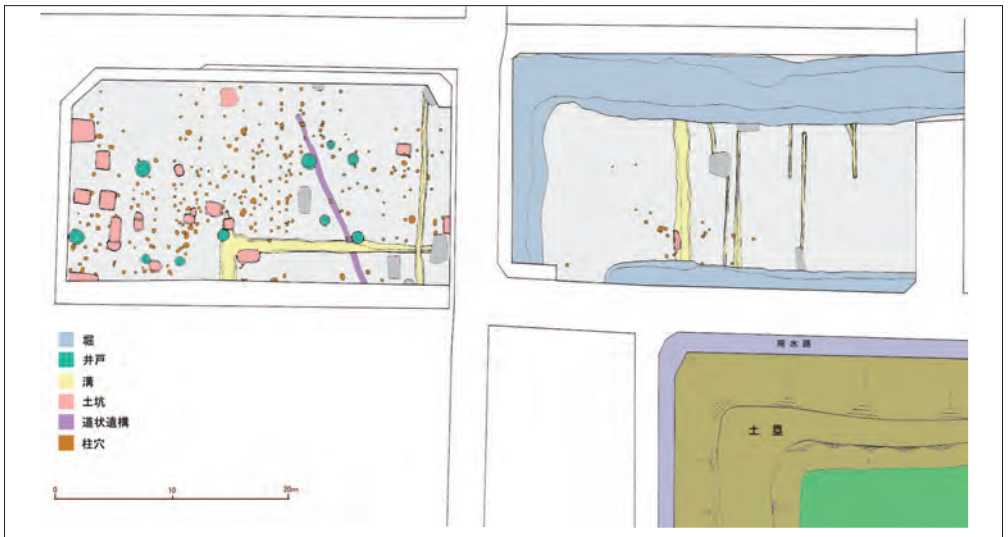
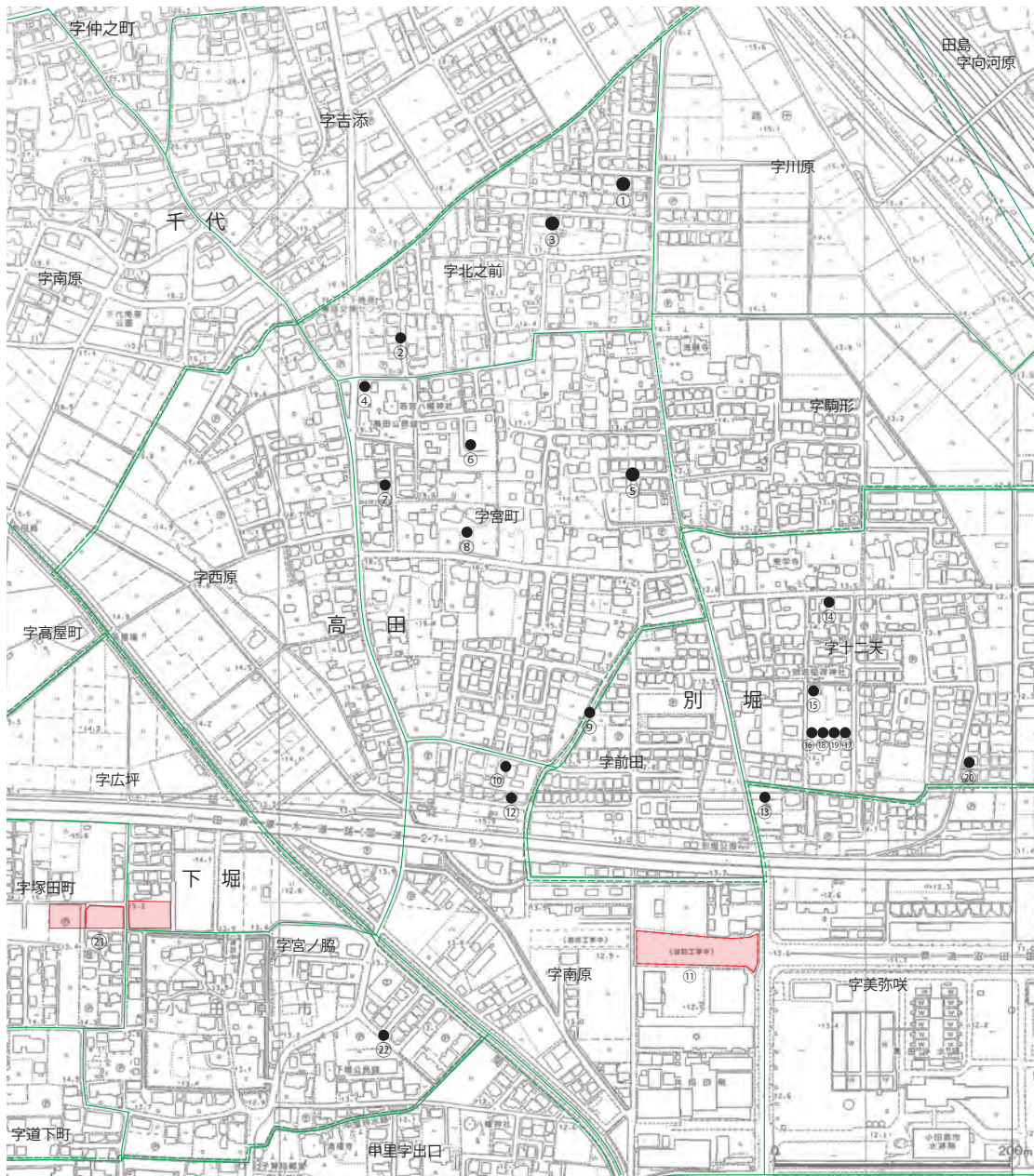


図10 下堀方形居館周辺の遺構配置図(1/650) (天野 2007 に加除筆)

4 近世、近・現代、そして次世代へ

江戸時代以降の高田・別堀地区、下堀地区は農村であったようですが、人々の生活の痕跡は考古学的にはあまり明らかになっていません。高田宮町遺跡第Ⅱ地点(5)や高田南原遺跡第Ⅱ地点(11)で江戸時代の磁器片がわずかに出土しています。

年月を経て、のどかであったらう農村も、新しい道路が走り、家々が建ち並ぶようになりました。住宅街の中で、下堀方形居館は、ひっそりと^{おうじ}往時の^{おもかげ}面影を伝えています。しかし、今日、下堀方形居館の土塁を私たちが見て、感じ、学ぶことができるのは、時代時代を生きた人たちが脈々と受け継ぎ、守ってきたからにほかなりません。遺跡は、その時代の人々の活動の痕跡であると同時に、後世を生きた人々の思いを一緒に伝えてくれているのかもしれない。



No.	調査地点名	No.	調査地点名	No.	調査地点名	No.	調査地点名
1	高田北之前遺跡第Ⅰ地点	7	高田宮町遺跡第Ⅳ地点	13	高田美弥咲遺跡第Ⅰ地点	19	別堀十二天遺跡第Ⅵ地点
2	高田北之前遺跡第Ⅱ地点	8	高田室町遺跡	14	別堀十二天遺跡第Ⅰ地点	20	別堀十二天遺跡第Ⅶ地点
3	高田北之前遺跡第Ⅲ地点	9	市道4385号工事採集	15	別堀十二天遺跡第Ⅱ地点	21	下堀塚田町遺跡第Ⅰ地点・ 下堀広坪遺跡第Ⅰ地点
4	高田宮町遺跡第Ⅰ地点	10	高田南原遺跡第Ⅰ地点	16	別堀十二天遺跡第Ⅲ地点	22	下堀宮ノ脇遺跡第Ⅰ地点
5	高田宮町遺跡第Ⅱ地点	11	高田南原遺跡第Ⅱ地点	17	別堀十二天遺跡第Ⅳ地点		
6	高田宮町遺跡第Ⅲ地点	12	高田南原遺跡第Ⅲ地点	18	別堀十二天遺跡第Ⅴ地点		

図 11 調査地点位置図(1/6,000)

文献

本書を作成するにあたり、引用または参考にした主な文献を掲載しました。高田遺跡群・下堀方形居館をさらに詳しく知りたい方は、参考にしてください。

- 天野賢一 2007「(仮称) 下堀広坪遺跡第Ⅰ地点・下堀塚田町遺跡第Ⅰ地点ほか」『平成19年小田原市遺跡調査発表会』発表要旨、小田原市教育委員会、26-33
- 天野賢一ほか 2006『高田南原遺跡第Ⅱ地点』かながわ考古学財団調査報告書199
- 大島慎一ほか 1988「高田宮町遺跡出土の土器について」『埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』小田原市文化財調査報告書第24集、小田原市教育委員会、9-30
- 2005『高田南原遺跡第Ⅰ地点』小田原市文化財調査報告書第132集、小田原市教育委員会
- 小笠原 清 1995「下堀方形居館」『小田原市史』別編 城郭、小田原市、357-360
- 佐々木健策 2005「下堀字宮ノ脇183番1号外における試掘調査」『平成14年度試掘調査(2)』小田原市文化財調査報告書第128集、小田原市教育委員会
- 2008「高田美弥咲遺跡第Ⅰ地点」『平成20年小田原市遺跡調査発表会』発表要旨、小田原市教育委員会、80-83
- 滝沢 亮ほか 2003『千代北町遺跡第Ⅴ・Ⅵ地点 千代仲ノ町遺跡第Ⅱ・Ⅴ地点 千代南原遺跡第Ⅵ地点 高田宮町遺跡第Ⅱ地点 国府津舞台遺跡』小田原市文化財調査報告書第113集、小田原市教育委員会
- 林原利明ほか 2001『高田北之前遺跡第Ⅱ地点』高田北之前遺跡第Ⅱ地点発掘調査団
- 藤沢市教育委員会博物館建設準備担当 1997『神奈川の古代道』博物館建設準備調査報告書第3集
- 山口剛志 2006「高田宮町遺跡第Ⅲ地点」『平成18年小田原市遺跡調査発表会』発表要旨、小田原市教育委員会、14-19
- 山口剛志ほか 2001『高田北之前遺跡第Ⅰ地点』小田原市文化財調査報告書第85集、小田原市教育委員会

小田原の遺跡探訪シリーズ5

高田遺跡群・下堀方形居館

— 古代高田郷と中世の居館 —

平成22年3月10日 印刷

平成22年3月15日 発行

編集 小田原市教育委員会

発行 〒250-8555 小田原市荻窪300番地

電話 0465-33-1715

<http://www.city.odawara.kanagawa.jp>

E-mail: bunkazai@city.odawara.kanagawa.jp

印刷 有限会社石橋印刷

